

青年期までのスポーツを通じた自尊感情の形成と

恋愛・結婚観との関連について

スポーツマーケティングゼミナール 1313064 山崎 ひかり

1. 研究動機・研究目的

現在の日本では「未婚化」と「晩婚化」が問題となっている。厚生労働省(2016)の報告によると、2015年の婚姻件数は63万5000組で、前年の64万3749組より8749組減少した。また、2014年の平均初婚年齢は、夫31.1歳、妻29.4歳で、前年比、夫は0.2歳、妻は0.1歳上昇している。現在の日本では、結婚の9割近くが恋愛結婚となっており、異性との交際は結婚相手の候補者を得る前提となっているといえる。しかし、未婚者の異性との交際状況の調査によると、1982年の交際相手なし群の割合が男性36.8%、女性30.1%に対し、2010年の交際相手なし群の割合は男性62.2%、女性51.6%となっている(第14回出生基本調査, 2010)。このように異性の交際相手をもたない未婚者が増加していることは、恋愛・結婚離れにつながるものであると懸念されている。一方で、肯定的な感情評価を表す「自尊感情」が高い人ほど良好な人間関係を築くことができ、自尊感情を向上させるために運動・スポーツの介入が有効である(遠藤ら, 2008)ことから、恋愛・結婚観に対してどのような影響を及ぼしているのかに着目した。エリクソンのライフサイクル論によると、人の一生の人格形成において、各時期に獲得する事柄が定められており、青年期においては、同一性(アイデンティティ)が達成課題とされている。その青年期に入る前の学童期においては、自尊感情が達成課題とされている。自尊感情とアイデンティティとの関連について小林(2006)は[中塚、片岡(2014)を参照]、アイデンティティの確立に自尊感情が重要な役割を担っていると述べている。先行研究からアイデンティティの形成と恋愛との間には関係があることが指摘されているが、アイデンティティの形成の前段階に獲得すべきとされている自尊感情の形成と恋愛との関連は明らかにされていない。

そこで本研究では、青年期までのスポーツを通じた自尊感情の形成と恋愛・結婚観との関連を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

本調査は、複数の大学(スポーツ体育会系、芸術、美術、理系)に対して大学1年生から大学4年生を対象とした。調査方法は、直接配布・直接回収及び、郵送での質問紙配布・回収とした。総配布数は241部、回収数は241部、回答率は100%であった。なお、有効回答数は241部得ることができた。なお、齋藤ら(2013)による研究調査を基に、恋愛に積極的か消極的かの2群への類型化を行った。類型化の方法は、複数回答で求めた恋愛経験と恋愛観に関する調査項目から該当する5項目のいずれかを選択した場合を各1点とし、合計得点が2点以上を「恋愛積極群」、1点以下を「恋愛消極群」とした。

3. 主な結果と考察

年齢は22歳が29.5%、19歳が24.9%、21歳が21.7%、20歳が12.4%、18歳が11.2%、23歳は1.2%であった。年齢の平均は、20.36歳であった。性別は、男性が53.5%、女性が46.5%であった。運動・スポーツ経験は、スポーツ経験ありが73.0%、スポーツ経験なしが27.0%であった。スポーツ経験ありと回答したサンプルの中では、男性が63.1%、女性が36.9%であり、スポーツ経験なしと回答したサンプルの中では、男性が27.7%、女性が72.3%であった。運動・スポーツを経験してきた者が約7割を占め、運動・スポーツ経験がない者を大きく上回った。男性においては、運動・スポーツ経験がない者は、27.7%と少なかった。以上の結果から、大学生になるまでの間に運動・スポーツと関わっている者が多いことが明らかになった。交際回数においては、統計的な有意差は認められなかったが、運動・スポーツ未経験者より運動・スポーツ経験者の方が平均交際回数が高かった。自尊感情と同一性においては、運動・スポーツ未経験者より運動・スポーツ経験者の方が得点が高かった。また、統計的な有意差は認められなかったが、親密性においても、運動・スポーツ経験者の方が得点が高かった。同一性と親密性においては、恋愛消極的群より積極群の方が得点が高かった。また、統計的な有意差は認められなかったが、自尊感情においても、恋愛積極群の方が得点が高かった。自尊感情と同一性との間に低程度の相関が認められ、自尊感情得点が高い者は、同一性得点も高いことが明らかになった。

4. 結論

運動・スポーツ経験が、発達課題(自尊感情・同一性・親密性)にプラスの影響を及ぼすことが明らかになった。また、自尊感情得点が高い者は、同一性得点も高い傾向にあり、相関関係も認められたことから、自尊感情の形成が同一性の形成にプラスの影響を及ぼしているのではないかと考えられる。また恋愛積極群の中に、発達課題得点が高い者が含まれていた。さらに、その恋愛積極群は運動・スポーツ経験者の占める割合が高かった。以上のことから、直接的な結びつきは明らかにすることはできなかったが、運動・スポーツ経験によって発達課題がプラスの影響を受け、間接的ではあるが恋愛に対して積極的に向かっているのではないかと推察される。よって、運動・スポーツ経験の介入は、恋愛への積極性に対して有効であると考えられる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

卒業論文の執筆にあたって、ご協力頂いたすべての方々に深く御礼申し上げます。そして、指導教員である工藤先生には大変お世話になり心より感謝しております。また、楽しい時も辛い時も一緒に過ごしたゼミ員がいたからこそ、2年間頑張ることができました。かけがえない仲間に出会えたことに感謝しています。ありがとうございました。